

第4章 『日米 太平洋の決戦』

この章をどのように書き始めようかと考えあぐねた。しかし、どう考えてもこれ以上のことを表現することができない。NHKドラマ『坂の上の雲』のナレーションをそのまま使わせていただく。

まことに小さな国が開化期を迎えようとしている。

小さなといえば、明治初年の日本ほど小さな国はなかったであろう。

産業といえば農業しかなく、人材といえば三百年の間、読書階級であった旧士族しかなかった。

社会のどういう階層のどういう家の子でも、ある一定の資格を取るために、必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも官吏にも軍人にも教師にもなりえた。

この時代の明るさは、こういう楽天主義から来ている。

今から思えば実に滑稽なことに、米と絹の他に主要産業のないこの国家の連中がヨーロッパ先進国と同じ海軍を持とうとした。陸軍も同様である。財政の成り立つはずがない。

が、ともかくも近代国家をつくりあげようというのは、もともと維新成立の大目的であったし、維新後の新国民達の少年のような希望であった。

彼らは明治という時代人の体質で、前をのみ見つめながら歩く。

登って行く坂の上の青い天にもし一朵の白い雲が輝いているとすれば、そののみを見つめて坂を登って行くであろう。

この小さな国は、ペリーの黒船ショックによって眼を覚まし、英米の後ろ盾もあって一等国を目指して坂を登ってゆく。しかし、それが実現するや否や、中国大陸における権益の衝突から坂を転がり落ちる。だが、ただ単に転がり落ちただけではなかった。アメリカ太平洋艦隊の根拠地であるハワイ真珠湾を空母の集中運用というイノベーションをもって空襲した。その翌年には米空母を太平洋から追いやった。南太平洋海戦において空母「ホーネット」を急降下爆撃する写真がある。日本海軍最後の至宝による雷爆同時攻撃は見事であった。

敗戦というショックによって、この小さな国は再び眼を覚まし、日々の食料にも事欠いたにもかかわらず糸へん金へん産業を興し、経済大国への道を突き進む。ジャパン・アズ・ナンバーワンと称され、自動車や半導体における貿易摩擦が日米経済戦争を激化させた。この戦争の勝者はどちらであったのか。